風韻

第25号
（平成3年度）

神戸大学風韻会

風 韻 第 25 号 目 次

所　　感 …… 師　匠　藤井　久雄…… 3

創立六十周年を間近にして …… 顧問教官　井川　一宏…… 5

先 輩 登 場

- ＯＢ会で想う …… ＯＢ会長　米花　稔…… 6
- 謡って六十年 …… 旧 1　藤井　茂…… 7
- 謡あれこれ …… 新 5　林　哲夫…… 9
- 会誌〝風韻〟創刊のことども …… 新 9　原　敏郎……10
- 苦　手 …… 新17　八十嶋敦子……11

学 生 投 稿

- 能楽部幹事学年物語 …… L 41　園田　里美……13
- ある日のジュニア部室 …… J 41　佐藤　誠……14
- 能と左右 …… S 40　石川　誠……14
- 春合宿 …… L 40　高森　理恵……16
- 能「田村」をやるにあたって …… M40　北村　浩……17

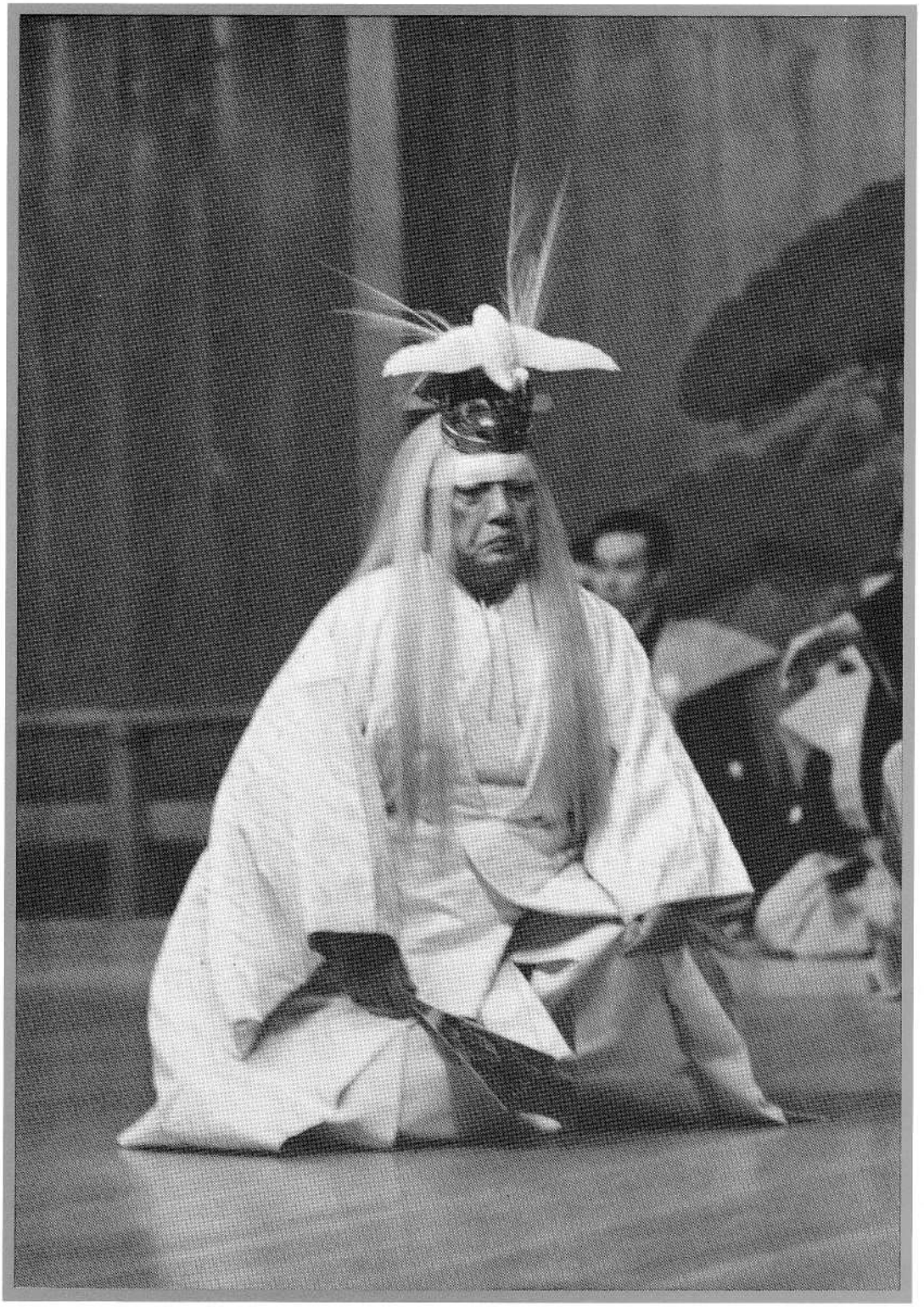
平成２年活動内容 …… 18

平成２年度決算報告・ＯＢ会（第12回）報告 …… 20

幹事長になって …… B41　石塚　誠治 …… 21

役 員 紹 介 …… 22

編 集 後 記 …… 22



「鷺」　　藤井久雄先生

所感

師匠　藤井久雄

私が神戸大学謡曲部へ稽古に行くやうになってから六七年、六七年と言えば長いやうに思えますが回数にすれば一ケ年に二十四・五回、そのうえ休む人もあり、中々思うやうには上達せんものです。然しよい先輩に恵まれ本人も亦好きで熱心であれば普通の人より早く上達します。私が学生集團稽古を始めたのは昭和六年秋、京大学生集会場で、三高の坂倉先生が肝入りで三十四・五人、部屋へ入るとむっとする程で、豪傑もあれば又坊っちゃんも有りでこれはこれはと驚きました。

次の稽古日からヨワクの音階をオルガンを使って稽古してみました。これが意外と好評で次の日から五十人を越す盛況でありました。その頃のお弟子はもうみな八十才近い人で私はその後昭和十二年に神戸へ来ることになり、京大の稽古日は京都の片山博通師が引受けられ戦後二十六・七年からは又稽古が始まり片山系の師匠達が稽古をつづけられ今日に及んでおります。この八月三十一日にには六十周年記念会が催され、私も招かれて出席しますが、嬉しい極みです。何時迄ぐさのいつ迄も変わらぬ友こそは買い得たる市の宝なれ……と松虫の独吟を謡いたいと思っております。その時代時代の人がその師匠を取り囲んで一パイやるのはまことに和やかな光景です。謡の稽古は昔から舞二年、太鼓三年、笛五年、鼓七年、謡十年と言われてゐますがこれはほんの上べだけでほんとの謡は二十年、三十年とまじめに続けてこそ物になるものです。

何卒皆様もこの道を生涯の趣味として熱心に続けて欲しいと思います。

藤井茂先生　　藤井久雄先生　　井川一宏先生

夏合宿（平成２．９．３）

創立六十周年を間近にして

顧問教官　井川一宏

昭和六二年四月から神戸大学能楽部の顧問教官（会長）を引き受けさせて頂いておりますが、雑誌「風韻」では着任後初めてのごあいさつです。どうかよろしくお願い致します。「風韻」の発行の間隔があいている間に、神戸大学能楽部にかかわる私の身辺にも大きな変化がありました。アメリカ出張中の一九八四年四月に師匠が藤井久雄先生に交代され、私も帰国（一九八五年二月）後の四月から藤井先生に謡を教えていただくことになりました。厄年のせいだったのか、八六年四月から三カ月入院してしまい、藤井師匠から激励をうけ能楽部の学生さんからも見舞いを受け、感謝いたしております。八七年二月七日前会長の荒川先生の最終講義「戦後わが国流通研究の回顧と展望」が行なわれ、そのなかには、先生の古典文学の知識の一端が盛り込まれていました。風韻第十三号に昭和四七年（一九七二年）四月から藤井茂初代会長の後荒川先生が会長に就任されたとありますので、十五年間会長をお引き受け下さったあと荒川先生はご退官されたことになります。七一年四月は私が神戸大学に奉職しましたので、それとほぼ同じ時期であるという事に縁を感じます。

荒川先生のあと三代目会長を命じられ、今日まで四年間続けていますが、藤井・米花・荒川の諸先生の深いお考えと同時に、やはり縁があったのかなと感じています。藤井茂先生との出会いは学生時代受けた広島大学での集中講義とそのときの企業訪問のお供です。その後思いがけず神戸大学に縁がありまして、同じ国際経済学を研究しております関係から、いつもご指導を仰いでおります。米花先生には神戸大学経済経営研究所でさきに妻がお世話になっており、そこに私が所属しましたので先生にはその後お世話になり現在福山大学でもご縁があります。荒川先生は雑誌風韻をとうして皆様に私を紹介して下さいました。第二十号で「井川一弘助教授がお稽古をはじめられ」とあり、第二四号で「その後は現副会長の井川一弘経済経営研究所助教授がお引き受け下さることになっています」とあります。今日の私の状況は、たしかに縁で始まっておりますが、その糸を巧みに操られた三人の先生のご計画による部分も大きいものと存じます。

雑誌風韻への私の初めての寄稿は昭和五七年度の第二二号です。その号では、荒川先生が「半世紀」のなかで「わが神戸大学風韻会が、宇治正夫先生というお方の御指導の下に、五十年を閲したということが・・・・・。本年創立五十周年を迎え」とかかれ、藤井茂先生は「謡って五十年」のなかで「昭和七年四月から宇治正夫先生をお迎えして・・・・・。神戸大学風韻会が発足してから今年で満五十年になる。」と記しておられます。もちろん次の風韻は五十周年記念号でした。私の二度目の寄稿は前回昭和六十年度の第二四号です。その号で師匠藤井久雄先生が始めて寄稿下さり、「所感」のなかで「宇治正夫氏のご来訪をうけ・・・・・歴史ある神大風韻会、その二代目とも申すべき師匠に」とお書き下さり、荒川先生は「宇

治先生から藤井先生へ」で藤井茂先生も「感激の一瞬」のなかで師匠の交代について詳しく記して下さっております。「編集後記」で「名称も風韻会から能楽部と変わり」とありますが、これは神戸大学に能楽部が一つだけになったことの必然的な結果でもあります。師匠の藤井先生のお許しもいただいておりますので風韻会と同じでそのように使っていただいてもかまいません。ともあれ私の寄稿した風韻は何らかの節目にあたっております。

計算しますと来年度（九二年度）が神大風韻会の創立六十周年になります。これまで発展してこれましたことにはもちろん師匠や先輩の先生方のお力もありますが、能楽部出身の先輩卒業者のご協力も大きいと感謝しております。昭和五四年度発足の神大風韻会ＯＢ会でも現役の活動をお知らせするとともに、いろいろご相談し助力をお願いしております。師匠も力を入れて下さり、来年秋の六十周年発表会にむけて能楽部の活動の充実化に励んでおりますが、現役部員の力だけでは及ばないこともたくさんございます。着物・袴などにも不足し、修理しきれないものもありますし、大きな発表会を企画しますと資金的に困ると思います。安易に先輩に頼ることは本位ではないのですが、寄付をお願いしなければならない状況です。ご面倒とは思いますが、どうかよろしくお願い致します。

最後に、能楽部がますます発展することを念じ、皆様とともに微力ながら私もなんとかそのための努力を行ないたいと考えております。

先輩登場

ＯＢ会で想う

ＯＢ会長　米花　稔

平成二年九月七日今年も大阪凌霜クラブでＯＢ会総会をもつ。大学風韻会元顧問藤井茂名誉教授、前顧問荒川祐吉名誉教授、そして現在の大学能楽部顧問井川一弘教授の列挙を得、学生の能楽部幹事長石塚誠治君（三年）、前幹事長石川誠君（四年）、元幹事長大出直子さん（平成三年三月卒）をふくむ広い世代にわたる二十余名の参加であった。

発足以来十年余今回が第十二回、謡を謡わない謡のＯＢ会という荒川教授の発案ではじめられ、昆布業に多忙な段野治雄君の行き届いたお世話で盛会であった。毎回会員の本業にかかわる卓話をうかがい、あと各員の近況報告で歓をつくすのが最近のスケジュール。今回はシャープ・ファイナンスの牧千雄君の「欧州と日本人」という最近動きの激しい国際情勢のなかの現場からの印象深いお話であった。先年の卓話では藤井茂先輩のゼミ出身で今回も出席の左鴻雅義君の今は本業の能楽笛方の「能と笛の話」も興味深かったことを

想起する。この会の縁で大学能楽部の定期発表会に、先輩の出演も増加傾向を示している。今回の出席者で藤井先輩を除く最年長は筆者と同期の西尾雄一君で、今も謡曲の現役で学生の会にもよく出演を得ている。今回は女性五名を含む若手の出演者の多かったことは嬉しい。たまたま今回は欠席のやや目立った常連の先輩者を加えると、これからのOB会の盛況が期待される。

折りから観世二十五代宗家観世左近師が八月二十六日六十才で逝去されたことが話題になり、死亡記事以外の報道が殆どみられなかった今日のジャーナリズムへの不満がのべられた。同様に数年前今大学能楽部の指導をいただいている藤井久雄師の新作能「菊水」が湊川神社で宗家父子の出演で発表せられた折も、地元新聞さえ十分な報道のなかったことを想起する。文化の時代をいうなかで。

私事で恐縮ながら、昭和五十八年一月宇治正夫先生の風韻会で、宗家観世元正（当時）師を地頭に藤井久雄師らと社中の方々の地謡で、筆者が「正尊」のシテを謡わせていただいたことは終生忘れられない。もちろん宇治先生のお定めによる。その宇治先生は昭和六十一年二月逝去された。想うと筆者の研究者としては、いうまでもなく恩師藤井久雄太郎先生を師と仰いでいるが、同先生が昭和四十五年七月逝去せられて以後の筆者の研究生活の支えが宇治先生であったという想いがいま深い。筆者が定年近くなった昭和五十年代はじめ、先生の風韻会記念会参加を機に、再び毎週火曜の朝お宅にけいこに通い、そこで「叱られることのさわやかさ」と「ひとりよがりのいましめ」という研究者に不可欠のことを、そのなかで痛感させられてきたからである。

想えば五十余年前大学入学早々宇治先生に謡の手ほどきをうけたものの、卒業後は怠り勝ちのなか、藤井茂先生のいつもながらの配慮で、大学の発表会、宇治風韻会に時に召集せられて、辛うじて継続性を保ち得、前にのべたように定年前後から再び現役にもどれたことを有難いと思っている。宇治先生亡きあとも、みつ子様朝子様のお世話で、お宅で門弟時に謡わせていただくものの、再び「ひとりよがり」の謡になり勝ち乍ら、学生の発表会に参加した折は、藤井久雄先生の地頭としての導きに、やはりハッとさせられる。研究者としても感謝している次第である。

半世紀余り前の大学入学時、この謡曲にふれる気になったのは、若くして世を去った父のこの道を熱心に趣味としていたからである。死の前年昭和九年それは筆者の学生時代であるが、姫路市公会堂で西宮の故村上義一先生の一陽会として、数百人の聴衆の前で、父が「安宅」を謡ったことをなつかしく想い出すのである。

謡って六十年

旧1　藤井　茂

一

会誌「風韻」が復刊されるについて風韻会の思い出や能に関することなど書くようにとの幹事長の申出に応じ、六十年の謡歴の若干を綴ってみた。

まず、何よりもうれしいことは故宇治正夫先生の跡を継いで下さ

った藤井久雄先生の熱心な御指導の下に神戸大学能楽部が益々盛大に活動していることで、「風韻」の復刊もその一環として意義深いものがある。

会の活動が活発となるにつれ、会の活動を記録し、会員相互の連携を密にし、さらに先輩や教官との間の情報伝達に役立てる意味で会誌の発行が望まれるようになる。

会誌「風韻」の創刊されたのは昭和三十五年で、当時私は神大経済学部長の職にあり、学生風韻会の会長（現在の顧問教官）として会誌の発刊を祝し「謡って三十年」と題する一文を寄せた。そこでは昭和七年四月から宇治正夫先生をお迎えして神大風韻会が生まれた経緯や、私を含め大勢の教官が宇治先生の個人指導を受け、多数の卒業生を送り出して、現役学生との交流も深まり、神大風韻会の外廓が拡大強化された次第を誌しておいた。

二

私は学生時代に二ケ年間、風韻会の前身鞍馬会に属していたが、本格的な謡の稽古は宇治先生に師事してからである。宇治先生が学生の指導を終えられた後で個人指導を受けたのが始まりで、当時私は大学を卒業して助手として母校に職を奉じたばかりの頃であった。したがって私の謡歴は研究歴と同時に始まったわけである。謡のほうでは宇治先生の厳格で熱心なご指導を受け、教えられる喜びを満喫することができた。こうした師弟関係が先生が亡くなるまで五十四年間続いた。

宇治先生が亡くなって一時は途方に暮れたが、今更他の師に就く気にもなれず、さりとて謡をやめるのも残念で、同じ思いの風韻会同志加藤芳雄氏と相はかり、宇治先生のお位牌のまつられている風韻楽堂の舞台で連吟を謡うことにした。そのうちに同じ思いの同志が次々に参加され、その数十人を越え、相談の結果、名を風韻練習会とし、月二回、日と曲目を定めて練習することにした。そのうちに女性の方々にも伝わり、同じような練習会が初まり、年二回男女合同の練習会を持つようになった。幸い宇治先生のお嬢様朝子様が舞台を守って下さっており、姉君の高橋みつ子様もお近くに住まわれ、女子の部のリーダーをして下さるので練習会も合同練習会も極めて順調に運び、会員も心ゆくまで謡って、謡の醍醐味を味わっている。

三

このようにして、私の謡は今日まで続いており、前後合わせて六十年になる。思えば遥けくも來つるものかなの感が深い。この間、謡によって受けた教えや恩恵は限りなく多いが、今年八十二才を迎えてとくに意味深く感じることを二つ挙げておきたい。

その一つは謡によって知らず知らずのうちに正しい呼吸を見につけえたことである。呼吸は寝た間も休まない。これが理にあっているか否かが健康を左右することは明かである。私はかつて正気療法の大家から「お前の呼吸は阿吽の呼吸の理に叶っている」とほめられたことがある。謡は腹から声を出すから健康によいとよく言われ

る。その通りであるが、私はひそかにそれよりも呼吸が大事だと付け加え、謡の功徳を讃えている。

その二は謡によって役どころを教えられたことである。謡にはシテ、ワキ、ツレ、子方など役が定められ、それぞれに応じる心得と演出をすることが求められる。人生についても同様で時には主役をすることもあれば時には従に廻ることもある。主役を退く年頃になって深く思うことは、後に続く主役を引き立てる役割に徹する心構えが必要であり、時には子方に廻って超然とすることも大切であるということである。私は今若い頃とは一味違った感覚をもって謡を味わうことに喜びを感じている。

謡あれこれ

新5　林　哲夫

一　二中ダッシュ先生

二中―大橋先生―ダッシュ

私が〝謡〟という言葉を初めて知ったのは中学一年の時である。昭和二十四年四月、名古屋から疎開して岐阜県笠松町に住んでいた私は岐阜県立第二中学校（通称二中、現加納高校）に入学した。中学の校舎は小学校に比べ、何となく重厚でアカデミックな雰囲気を感じさせたが、反面至るところに戦争の厳しさが漂っていた。入学式の時は二・三年生が揃っていたが、五月からは三年が学徒動員で工場へ勤労奉仕に行き、七月には二年もこれに続いたので勉強するのは一年生だけとなった。

校長の市原哲夫先生（私と全く同じ名前で、しかも先生のお嬢さんの寿子さんは私の姉の寿子と女学校で同級であった）は電気ナマズのあだ名があり、数学を教える他、自ら便所掃除をされることで有名であった。

他の先生方は一ケ月交替で工場へ勤務されたゝめ同じ学科が一ケ月毎に先生が変わり、国語も三人の先生に交替で教わることになった。

最初に教わったのが〝ダッシュ〟こと大橋太郎先生で、大垣から通勤され、水都大垣の鋸鹿城に因んで鹿水と号し、俳句をたしなまれた。（ダッシュの由来については後に述べる）先生は当時の厳しい雰囲気の中で、出来るだけ幅広い知識を生徒に与えるべく情熱を注がれた。教科書に俳句が出てきた時は丸々一時間を費やして俳句の説明をし、芭蕉―子規―虚子に至る俳壇の歴史を説かれた。謡曲（確か羽衣だったと思う）が出た時は、能と謡について実演を交じえ詳しく解説されたが、能に五流あり、又観世の別派に梅若というのがあって…と黒板に書かれたことを今でもはっきり覚えている。極め付けは秋の文化祭で歴史の先生と二人で素謡〝紅葉狩り〟を出された。

大橋先生が二中へ着任される前に〝神経〟というあだ名の先生がおられたが、新任の大橋先生の丸顔でやゝ神経質そうな風貌が〝神経先生〟と瓜二つであるということで〝神経ダッシュ〟なるあだ名

がつき、やがて単に〝ダッシュ〟と呼ばれるようになった。私達が入学した時は本家のかたはすでに転勤されており、ダッシュから逆に本物を想像する他なかったがよほど似ておられたらしく、先生ご自身もこれを認め、後年ニックネームの由来を自ら学内の文芸誌に書かれたことがある。

私とは不思議にご縁が深く、後に文芸部へ入って俳句を教わることゝなった。先生はやがて大垣高校に転校されたが、今でもお元気で一昨年は自作の随筆集を送って頂いた。

二　風韻会

ゼミで藤井先生に謡を勧められ風韻会に入ったのは大学三年の十一月と随分おくての方である。幹事長の上野君（現上野商会社長）が熱心にしぼってくれたが一向に上達しなかった。

日本毛織入社後四年ほどは比較的まじめに練習したが次第に仕事（？）酒・マージャン・等に多忙となり、やがて本社が大阪と神戸に別れるに及んで残念ながら日毛謡曲部も事実上解散となった。

三　凌霜謡会

昨年の凌霜謡会に藤井先生のお誘いで初めて出席させて頂いた。これ迄はうまく逃れていたが昨年は有無を言わさぬ感じで案内状が舞いこみ、出演したい曲目を申告せよとのことなので猛々と記入して提出した。これならば練習も楽だし時間もラストだからと思っていたところ、忽ち先生に看破られて景清のツレ姫もやるようにとの返信が届いた。しまったと思ったが後の祭りで景清の練習をする羽目となった。

久しぶりに座った感想は足がきつくなったの一語に尽きるが、大先輩の方々は足など物ともせず頑張っておられるので、相当のプレッシャーを感ぜざるをえなかった。

今のところ凌霜謡会へ出るのと、風韻OB会に出席するのが精一杯であるが、〝毎日が日曜日〟の季節が近付きつつあるので、それ迄に少しづつ準備運動をしておかねばと思っている次第です。

会誌〝風韻〟創刊のことども

新9　原　敏郎

ここに風韻創刊号がある。昭和三十六年三月二十六日発行とあるから、私達新制九回生の卒業式の頃のことである。三十年昔に時計の針を戻しながら、創刊時の想い出話の一端を披露したい。現役学生諸君のお役に立てば幸せである。

私と共に編集委員の一人をつとめてくれた松岡氏（新制九回J）の筆になる編集後記によると、一昨年来の懸案である会誌第一号ようやく誕生することになったとあるから私達が幹事学年の三年の時に発案し、そのまま四年になってもこれを引き続き手がけ、卒業式の日に発行にこぎつけたということになる。

私の記憶が正しければ、卒業歓送会の時に二年生（新三年生）が幹事学年になり三年生（新四年生）はお役ご免になる。つまり、就職・卒論等忙しいということで解放される伝統だと思うが、四年生になったら何もしないというのではなく、日常のクラブ運営は幹事学年の三年生に任せても何かクラブの為に役立つことをするのがよいと思う。私達は、これまでなかったクラブ誌〝風韻〟の創刊を手がけた。今となっても、大変いいことをしたと満足している次第である。

序でに言わせてもらうと、〝合宿練習〟の制度も、それ迄中断していたのを私達が幹事学年の時に復活した。

会誌〝風韻〟に話を戻すと、原稿を集める苦労につき、松岡氏は「初めてお目にかかる人に原稿をお願いするものですから恐る恐る言う始末でしたが、訪問・電話で集中攻撃を加え、最後は将を得んと欲せば馬を射よで奥様を口説き原稿をお願いしました。」とある。この熱意、今後のクラブ活動の指針の一つにしてもらえば有難い。

私が、編集委員を代表して巻頭言に書いたのは、「風韻会が現役学生の場であると同時に卒業生にとっても、いつまでも風韻会一年生のつもりで自由に参加できるような場であって欲しい。風韻創刊を機に現役会員・卒業生会員の連絡を密にし、以て風韻会一層の発展を期そうではないか。」ということであるが、スポーツクラブは卒業生と現役は一緒にプレーできないものが多いが、謡は可能である。そうは言っても、卒業すると大抵の人は謡から遠ざかっていく。そんな中で謡ぬきの集い〝OB会〟が発足したのである。

何れにしても、今後現役学生諸君が機会を把えて、先輩にクラブの現状をPRされる様望みたい。

私達編集委員が、学生服に身を包み藤井教授（当時のクラブ指導教官）に連れられ、風韻発行打ち合せの為に宝塚にある宇治師範のお宅におじゃましたのが、つい昨日のことの様であるが、あれから三〇年、会誌〝風韻〟の名付け親宇治師範と私と同期の編集委員の一人、福光氏は既にこの世にはおられない。元に戻らない三〇年の年月を想うと、うたた寂寥の感を禁じ得ない。

苦手

新17　八十嶋　敦子

先日「朗読を楽しむ会」という催しがあって、それを聞きに行った。こじんまりした会場で、聴衆が百人も居ただろうか。主催しているのは目の不自由な人のために本を読んで、それをテープに吹き込んで送る、ボランティア活動をしている人々の会であるということであった。女性ばかりのグループらしかった。会場を秋草がやさしく彩を添えていた。

日頃の活動では、本の種類は、文学作品に限らず、歴史や政治、自然科学関係にも及ぶという。しかしこの日は「楽しむ会」と銘打って会の人自身の研究のためということで、文学作品が中心に選ばれていた。「窓際のトットちゃん」に始まって「更級日記」や詩更には童話が披露された。

朗読というものを正面から追求したことがなかったので、もの珍しく聞いていたのであったが、そのうちに私自身の身近な事などが、朗読の声と重なって頭の中をよぎり始めていた。

わかるように読むこと、これは相当むずかしい。私は国語の教師だから、生徒に読んで聞かせる事が度々ある。「脇息の上に経を置いていと悩ましげに読みゐたる尼君」と読んでみる。この「キョウヲオキテ」がむずかしいのである。発音通りに書くと「キョオオオキテ」となるわけで「オ」三つを識別できるように読まねばならない。私のように教室で読むのならば「教科書チャント見トケー」ですむのであるが、テキストが無かったり、また盲人の方が相手ではそうはいかない。

美しい声で朗読する人が居た。うっとりとして聞いていた。天性の美質なのかあるいは訓練の賜物なのか、恐らく両方であろうが、とにかくこれこそ朗読の至高だとおもったものだ。しかしながら、そうでもないことにすぐに気がつくことになった。

余り通りのよくない声で始めた人がいた。聞き辛いかと思っている間に引き込まれていた。その声は、読んでいるその詩にぴったり合っているのである。また、最後に出て来た人は「かくしゃく」という語を進呈したい位の年配の人であった。失礼だがこの位のお年になると、声量の問題、歯の問題といろいろハンディがあるものだ。さてどうなるかと思っていると、なんとその老婦人の口から、宮沢憲治の力強い文体が、朗々と流れ出て来たのである。

自分もやればできるだろうか。卒業してから、休み休みしながらも宇治先生のお宅の練習に参加させてもらってきたから、少しは声も出るだろう。国語の教師を長年やった副産物で少々の読書量がある。門をたたけばこの世界でお役に立てるかもしれない。とここまできて、自分がとんでもないことを考えているのに気がついた。

若い頃、つまり今から何になろうか考えていた頃であるが、私は決してこんなことを思いつく子供ではなかったのだ。恥ずかしがり屋で声は小さくて、人前に出るのが大の苦手であった。演劇や朗読などは夢のまた夢であった。今そんな話をしても、大抵は信じてもらえない。その転機になった出来事が、実は風韻会にあった、と今思い出すのである。

いつの合宿であったか、その最終日、各々成果や感想を順に述べ合う時間があった。その中の一人が、一年上の女の人であったが、次のように言ったのだ。

「わたしは、大きな声を出すのが苦手やから、このクラブで謡をやっているのですが・・・」「苦手やからやる」この一言を私は驚きをもって聞いたのだった。向いているから、得手だからやるのじゃなくて、苦手だからやる。そんな考え方をできる人が居る。

目から鱗が落ちた、というべきだが、実はそうすぐには落ちなかった。しかし次第にこの一言は私の中に棲み着いていった。そして、「下手でやってたっていいじゃないか」と私流の開き直りになっていた。謡も、失礼ながら、下手でも続けさせてもらったし、人前で話す教師の仕事もまだやっている。もっとも仕事の方は、こう長くやっていれば、何百人だか何千人だか居る教え子に多少なりとも責任をとらなければいけないから、向いてないとも下手とも言えないので、近頃は、苦手でも続けていればなんとかなる、と思うことに

している。
そしてその日、朗読を聞きながら、やること、そして続けること、そのことをつくづくとかみしめたのであった。

学生投稿

能楽部幹事学生物語

L41 園田里美

ある晴れた日、井川先生は生田川のほとりを散歩しておられました。すると、風が吹いて、先生は手にしておられた謡本を川に落してしまいました。

「ああ困ったものだ。どうしたらいいだろう」と先生は頭を抱えてしまいました。そこへ、カエルがピョン！「わたしが友達に頼んで探して来てあげましょう。おーいみんな」

その声に応えて、おやおや、たくさんの友達がでてきました。あひる、カニ、熱帯魚、かまきり、ペンギン、てるてるボーズもいます。「こういう訳だから、みんな、謡本を探すのを手伝ってくれないか」とカエルがいうと、「ああ、もちろんだ」とみんなは口々に答えました。

それから、みんなは川を下りながら謡本を探しました。カニと熱帯魚は水の中を、あひるは水草の中。かまきりは、川辺を。ペンギンは、じゃぶじゃぶ。てるてるボーズは身の軽さをいかして空から

探します。
そうして日も暮れなゐの宵の頃、みんなはようやく謡本を見つけることができました。
「やああありがとう。お礼に謡を謡いましょう。何がいいかな：うん、めでたく高砂といこう」それが先日の歓送謡会だったのです。
そして、その時謡本探しを手伝ったみんなは、心優しい天人が舞ってくれた富士太鼓の舞囃子の功力で、カエルは幹事長に、ペンギンは副幹事、カニはちょっきん会計、熱帯魚は石井君、かまきりは上嶋君、あひるは安田君、てるてるボーズはひろてるみと名乗り、平成三年度の幹事学年を勤めるのでした。めでたしめでたし。
作者あとがき……ごめんなさい

ある日のジュニア部室

J41　佐藤　誠

私がある日ジュニア部室にやってくる。鍵がかかっているのを見つけ、『ほっ、今日は誰もいない。隣もうるさくないし、ゆっくりと英語の予習ができるぞ』と思いながらおもむろに教科書と英語の辞書を取り出し予習を始めた。予習を始めて5分とたたないうちにI君登場。『相変らずドタバタとうるさい奴よのう』と思いながらも簡単なあいさつだけで予習を始める。ところが、隣でIくんが取り出したのは週刊少年ジャンプと家族亭のハンバーグ弁当。『こいつ卑怯なー、一人だけで昼飯食いやがって』と思いながらも「I、後でジャンプ読ませてね」と猫なで声になってしまう自分が悲しい。再び教科書にむかい予習を始める。
コツ、コツ、コツ。コンコン。「入っていい？」とかわいらしい声が聞こえる。『あっ、T先輩だ。今日は何を持ってきてくださったのだろう。Mr．ドーナツか、はたまたさくら餅か。いつもおいしいからいいんだけど誘惑に負けてこの2年間に私は3キロは太ったはずだ。にもかかわらずT先輩の体形はスリムなままだ。あの秘密を知りたいものだ』と思いながら持ってきてくださったMr．ドーナツに手を出す。やっぱりおいしいなぁ。これで500グラムまた増えた。ふと時計を見る。午後3時。あっ、3限が終わった。ああっ、私の単位がまた消える。どうしよう。このようにしてジュニア部室の一日は暮れるのであった。（なおこの文章はフィクションであり、登場人物・団体名は架空のもので実在のものとは一切関係ありません）

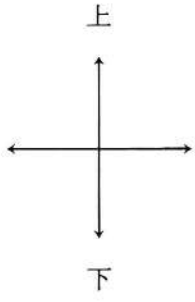
能と左右

S40　石川　誠

左右が存在するのは動物と人間の作った物だけである。石や木には左右がない。
動物は左右ほぼ対称である。では左右対称だから左右が存在する

のかというとヒラメはどうなるということになる。

石ころには上下がない。木には上下があっても左右はない。左右がないだけじゃなくて前後もない。特別な見方をすると月には左右がある。月の見える方を前、見えない方は後とすれば左右を決定できる。つまり、前後があってこその左右なのだ。図の様に前と後、上下を定めると紙のあっちが左でこっちが右である。



鏡が左右を逆転させる理由はここにあるわけである。鏡は上下をひっくり返さず前後をひっくり返してしまう。結果左右は入れ換わるのだ。

以上から動物のように前後のあるものだけが左右をもつといえる。

能舞台において橋がかりは向って左にある。何是だろう。役者がつくりものや扇を右にもって出てくるからだろうか？舞台は南面している。だから舞台向かって右は鬼門である。方向が悪いからだろうか。

これらも橋がかりの決定要素の重大要因であることは想像に難くないが、それ以上に重要であろうと思われる点がある。人間の体というものは対称に出来ていないものらしい。眼球も左が大きいし、心臓は左によっているし足は左が大きい。たいていの人は左の方が美形なのだそうだ。これが何の関係があるのかというと、橋がかりを左におく以上、地謡は左におけず右におかなくてはならないが、これをかえって地謡を右におくために橋がかりを左においたと取り得るのではないか。その方が見栄えがよいから。

左が美しいと感じるのは物理的事実以外にも理由が考えられる。それは母親のおもかげを左にみるからである。そんなアホなと思うなら、自分の母親を思い出して見るといい。一般に母親のイメージは左面優位である。

左面優位の母親像は何によって生まれるのだろう？いったいいつ我々は自分の母親を左からばかり見たのだろう？家の中では交通ルール等ないから、日常生活とは考え難い。テレビのアイドルじゃあるまいしどちらの面を見せようと考える母親もおるまい。

しかし子供の頃ずっと子供の頃なら左ばかり見ていたころがあったのである。

赤ん坊は左胸に抱いて右の耳を心臓におしつけないと泣きやまないものなのだそうだ。母親は来る日も来る日も赤ん坊の右耳を心臓にあて顔の左面をさらし続ける。これにより母親のイメージが左面優位で固まると考えられる。

中入り後多くの能ではワキがワキ座からワキ正を通してマクを見る。この場面でも役者はキキ顔である左を見せることが出来るので

ある。
ワキのみならずシテも常座にいれば舞台正面から顔の左面を見せることが出来るのである。
5番目物等では善玉であるワキ等が悪玉であるシテを顔の左面を見せつつ幕へ追いやる。シテは凶悪な右面を見せつつおそいかかる。しかし結局やられてしまうのだ。
だから舞台上での顔の方向転換はかなり重要ではと思われるが本当のところ、この理論は正しいかどうか分かりかねるので困っちゃうんだな。

春合宿

L40　高　森　理　恵

三月四日から十日まで小豆島「きらく荘」で春合宿を行なった。
神戸メリケンパークのポートタワー横から関西汽船フェリーで三時間、小豆島はよい所である。暖かいし、車が少なく草と土と海の匂いがする。きらく荘は更に良い。宿のすぐそばが海で部屋からは穏やかな瀬戸内海、遠くに四国が一望できる。また食事がおいしく量も多いので朝からごはんを六杯食べる某三回生を始めとする大食家達の胃袋をすっかり満足させてくれる。
合宿中は午前七時に起床、全員砂浜にでて体操をする。普段このような早い時刻に起きたことのないなまくら下宿生は眠くてたまらないが、重いまぶたも朝の冷んやりした空気と心地良い波音のおかげで少しずつ開いてくる。しかし、朝が弱いこの集団の朝食時は非常に静かである。
九時より謡の練習。途中休憩があるとはいえ「三時間」はつらい。足は痛いし、節は難しいし一回生の頃は半泣きで謡ったこともあった。今は教えることの難しさの余り泣きそうになる。今回は下級生が多くパック練習になった。二回生（現三回生）男子達に鉄輪を教えた時、嫉妬して徒し男を憎むが一方で恋しさを捨て切れずにいる女の悲しさを感じる、と言うと、「こんな嫉妬深い女は嫌だ」「可愛気がない」「浮気は男の本質か」等と言われ、頭を抱えてしまった。
一日の練習は午後の謡、仕舞、連吟、講座とまだまだ続いていく。夜はノート書きが待っている。謡の練習で気づいた点をまとめるのだが、上回生は一回生の分を書き、二回生の添削をしなければならない。上回生の夜は短い。
合宿は集中して練習できる良い機会だ。スケジュールを見ると確かに練習三昧であり、他サークルの合宿と比較すると厳しいようだが、大学生活を振り返って合宿の思い出の占める割合は大きい。練習の厳しさ然り、春の陽に水面が輝く瀬戸内海を前に謡う心地良さ然り、コンパのカラオケまた然り。
一週間の春合宿を終え、また船にとり乗りて三時間、ポートタワーから六甲摩耶山にかけての一千万ドルの逆夜景に迎えられ神戸港に着く。都会の雑踏の中に身を置くと小豆島が龍宮に思えた。

能「田村」をやるにあたって

M40　北村　浩

本年の関西学生能楽連盟の春季大会で能「田村」の後シテをやらせて頂く事になりました。何も知らない素人がいきなりシテをやるのもおこがましい話かも知れませんが、このクラブでの目標でもあったので、身に余る光栄と二つ返事で承諾しました。

型付けは藤井先生にお借りし、また型の指導もして頂きました。初めて床几に掛けた時には先生の前ながら思わず顔がにやけてしまって稽古が中断してしまいました。そういう和やかな稽古もはじめの内だけで、進んでいくにつれ、最初に見て頂いた後に「後でもう一度やりましょう」と、他の部員を見た後にまた見て頂くという異例のこともあり、先生の能に対する厳しさを感じて、改めて能というものの凄さを痛感しました。

九つの大学が集まっての合同ものなので、総合監督としては学連顧問の山本博通先生に立ち会って頂いているのですが、まだお若い方なのでシゴキ方は体育会系のそれに相通ずるものがあります。「基本姿勢が駄目。もっと腰に力を入れて、胸を張る。腹と足に力が入ってないから足拍子や運足の時に肩が揺れるんだ」とか「もっと腹から声を出せ」と、日頃自分が後輩に対して言っているようなことを言われて何やら気恥ずかしいような、こんなところを後輩には見られたく無いような、妙な気分になります。

稽古の時に言われたことは、一つ一つ非常に印象深いものでした。その中でも、シテの出の時に僕が何もかも流れてしまうようなメリハリの無い型をやって叱られて言われたことが、特に印象深いものでした。

「幕が上がり、舞台に出てきたシテはまず最初に右受けをやる。この意味はな、出てきたシテが、舞台のエネルギーを吸収するつもりでしっかりと舞台を見据えるための所作なのだ。そして一声の囃子に乗っていく。実力が5あったとしたら、ここからの気合いと勢いで8まで持っていける。」

〝この橋掛りから舞台に出ていこうとする人は皆そういう気持ちで歩み始めていた〟

そう思った瞬間、やわらかい照明にてらしだされた舞台が、あたかも生きもののように息づいて、目の前に浮かび上がってきたように感じられたのです。

最後に、能楽を学生がやるという事は、容易に出来ることでは絶対にありません。かなりの忍耐と努力と覚悟が必要になるでしょう。軽い、なまはんかな気持ちでは振り落とされるし、しない方がましです。泥臭い、生意気な事を言うようですが、これはまさに現時点で自分が痛い程感じて苦しんでいることなのです。

平成二年活動内容

三月　春合宿（於　小豆島きらく荘）

練習曲（謡）

「東北」「嵐山」「鞍馬天狗」等　一年

「安達原」「菊水」等　二年

歓送謡会（於　松泉館）

舞囃子　卒業生

「敦盛」　北口勝也

「羽衣」　玉田朋枝

「松虫」　桑木倫子

素謡　「殺生石」　シテ　粟野宏昭

「巴」　シテ　桑木倫子

「船弁慶」　シテ　玉田朋枝

四月　古典芸能発表会

新入生を対象として仕舞を十番ほど発表します。

五月　旧三商大交流会（於　国立能楽堂研修能舞台）

二年生以上が素謡、仕舞を発表

梅園・荒木両先輩が仕舞をされました。

ジュニア合宿（於　六甲パーラー）

二年生が一年生に謡や仕舞を教えます。

コンパ後皆で六甲台正門前に夜景を見にいきました。

六月　**新歓コンパ**

そろそろ1年生も本領発揮

学連春季発表会

一回生　初舞台

連吟　男子　大仏供養

女子　土蜘蛛

二回生　仕舞

七月　**三大学合同発表会**（於　上田能楽堂）

全員の素謡・仕舞を発表

八月　**夏合宿**（於　氷ノ山屋）

練習曲（謡）

「竹生島」「経正」「羽衣」　一年

「船弁慶」「賀茂」等　二年

若いOBの方がたくさん来て下さり合宿発表会では「土蜘蛛」の素謡等をして下さいました。

十一月　**自演会**（於　松泉館）

舞囃子「敦盛」　沼本直子

「清経」　田中敦子

「田村」　北村　浩

「松風」　高森理恵

「紅葉狩」　石川　誠

十二月　クリスマスコンパ　恒例のプレゼント交換

平成二年度決算報告

収入		支出	
今期徴収部費	768,124. -	先生謝礼	340,000. -
大学援助金	130,000. -	自演会	233,000. -
先輩寄付金	66,960. -	歓送謡会	298,000. -
発表会役料	207,000. -	旧三商大発表会	63,700. -
その他	330,029. -	学連春季舞台料	14,500. -
繰越金	565,733. -	三大学発表会	37,900. -
		学連費	45,400. -
		通信・渉外費	135,537. -
		文具費	24,634. -
		雑費	298,190. -
		来期繰越金	586,985. -
	2,067,846. -		2,067,846. -

平成二年度(第十二回)OB会報告

とき　平成二年九月七日（金）

ところ　大阪駅前第一ビル11F大阪凌霜クラブ

会費　五千円

参加者　藤井茂、米花稔、左鴻雅義、井川一宏各先生、西尾雄一、江谷剛、牧千雄、里井三千雄、林哲夫、段野治雄、加藤文子、中塚久美子、木下宏志、木下みゆき、梅園健治、嶋由香里、北口勝也各先輩

多数の先輩方の御参加をえて、盛大に行われました。

次回もどうぞ気軽に御参加ください。

会計報告

収入の部

会費	90,000円
寄付	15,000円
繰越金	32,605円
	137,605円

支出の部

会場費	76,529円
通信費	30,644円
雑費	360円
写真代	463円
次年度繰越金	29,709円
	137,605円

幹事長になって

B41　石塚誠治

幹事長になって三カ月。春合宿・歓送謡会もなんとか終えることができ、新入生勧誘の時期を迎えています。二年前、軟派なテニスサークルに入って、車を買って――云々とあらぬ期待に胸を膨らませて入学した自分が現在このクラブの幹事長に就いているというのは不思議な気がします。

さて、神戸大学能楽部も風韻会から数えて今年で五十九年です。五十九年といえば私の父より6歳年上になり、その歴史というものを感じさせます（こういう比べ方でしか実感できない）。幹事長になる前は、――五十九年の歴史――その重みに少しと惑っていました。しかし、実際に幹事長になってみて感じたのは、――五十九年の歴史そして未来への責任――それは決して重圧ではない、むしろ励みとなり誇りになるということ、そして伝統は私達を縛り付けるものではない、私達もまた伝統を歴史をつくっているということです。

この五十九年目に幹事学年になった私達は次のような基本方針を打ち出しました。

『元気に、かつ真剣に』謡において「腹に力を入れて一心に歌うこと」は、最も大切な基本であり、大前提である。これができてこそ節回し・拍子が生きてくるのであり、いくら難しい節を歌うことができても、腹から声が出せなければダメなのである。

同様に、練習においても基本に忠実であることは大切である。仕舞において基本姿勢が重要であることは言うまでもないことである。謡や仕舞だけではない。けじめをつける・練習に集中する・礼節を守るといった基本的なルールが守られないかぎり、円滑な部の運営も望めない。

怠惰・安寧に流れがちになるという組織の宿命に逆らうのは、能楽部員としての自覚と能への情熱のみであることを今一度ここで確認しておきたい。

基本に立ち返り本質を見極めようということが言いたかったのですが、なかなか思うようには・・・。

以前読んだ本に「美しい言葉」について次のようなことが書いてありました。その筆者が京都のある染色家を訪ねたときのことです。淡いようでいてしかも燃えるような桜色に染まった糸で織った着物を見せていただいた。「この色は何から取り出したんですか」。「桜からです」と聞き、筆者は桜の花びらを煮詰めて色を取り出したものだと思ったそうです。しかし実際には桜の皮から取り出したもので、さらにこの桜色は1年中どの季節でも取れるわけではない、桜の花が咲く直前に山から皮をもらって来て染めるとその色になるのだとききました。春先、もうまもなく花となって咲きいでようとしている桜の木が、花びらだけでなく、木全体で最上の桜色になろうとしているのです。花びらは、木全体の桜色――幹の桜色、樹皮の桜色、樹液の桜色――がほんの先端だけ姿を出したものにすぎないのです。言葉も同様で、人間全体という大きな幹の一端をのぞかし

ているにすぎず、美しい言葉とか正しい言葉と言われるようなものはどこにもなく、言葉を発している人間全体を背負っているというのです。逆に言えば、言葉ーーだけではないがーーから人間全体という本質に迫らなければならないということです。

これは言葉についての例であるが、本質に迫るということは非常に難しいことです。しかしいくらかでも近づけたら・・・と思います。

以上、何かと不明瞭な言葉の羅列となりましたがこれが現在の心境です。

最後に、いろいろお世話をおかけすることになると思いますが、藤井先生をはじめ荒川会長並びに諸先輩方よろしくお願い致します。

役員紹介

幹事長	B41	石塚　誠治
副幹事長	L41	園田　里美
会計	J41	佐藤　誠
渉内	A41	弘　央子
学連	B41	石井　真吾

編集後記

◇「風韻」第二十五号をお届け致します。お忙しい中、原稿をお寄せ頂きました皆様方に深く御礼申し上げます。早くから原稿を頂きながら発行が遅くなり、申し訳ありませんでした。

◇六甲台の部屋も新一回生を八名程迎え、活気に満ちています。現在の部員数は二十五名。新たなる黄金時代を築いていきたいです。

編集代表
安田　幸宣
石川　誠
高森　理恵